大学で知った学びのおもしろさ
4年間の学生生活が形づくった私の「今」

interview

菊池 のどか さん

平成31年3月、岩手県立大学総合政策学部卒業。「（株）かまいしDMC」に入社し「いのちをつなぐ未来館」に勤務。令和3年より、防災・復興事業やまちづくりに取り組む「（株）8 kurasu」を仲間と共に起業。

日頃の防災学習が生かされた東日本大震災での避難

東日本大震災発生時、私は釜石東中学の3年生でした。卒業式を2日後に控えたその日、3年生は学校に残り卒業式のための合唱練習をしていました。1、2年生はそれぞれの場所で部活動を行っていた時間でした。

その地震は、これまで経験したことのないものでした。長い時間収まることなく、大きな揺れと小さな揺れを繰り返し、このまま終わらないんじゃないかと恐怖を覚えました。「長い揺れには気をつけろ。津波が来るぞ」。以前、地元の大人たちが言っていた言葉が頭のなかに蘇りました。

実は震災の2年前から、私の所属していた整美委員会では防災に取り組んでいました。中学2年生のときに兵庫県で行われた「ぼうさい甲子園」に参加したことをきっかけにさらに防災に興味を持つようになり、私は防災リーダーに。普段の授業などを通して地震や津波のメカニズムについて先生方に教えていただいたり、生徒をいくつかのグループに分け、海上保安庁や消防署などから専門知識を持つ方を招いて分野ごとに学んだりする機会を設けていました。その成果もあったのだと思いますが、「これは津波がくるやつだ」と皆が瞬時に判断し、すぐに避難を始めることができました。

普段の避難訓練でしていたように、いったんはそれぞれいた場所から校庭の決められた場所に集まり点呼をとっていたところ、職員室から「早く走れー！」と先生の声がし、私たちは高台にある「恋の峠」を目指して走り出しました。

その時、隣接する鵜住居小学校の生徒たちは校舎の上の階に避難していたそうで、校庭にその姿は見えませんでした。私たちは小学生が学校にいるかどうかもわかりませんでしたがもしいた場合を考えて、また近隣住民にも伝わるようにと、「津波が来るぞ」「高台に逃げろ」「早く避難しろ」と口々に叫びながら避難場所を目指しました。小学生たちはその後、私たちの声を聞いて校舎から出て避難したそうです。

大学は、自分のやりたいことを突き詰める場所

復興していく故郷の役に立ちたい、そのために故郷の近くで学びたいと県内での大学進学を考え始めた私でしたが、進学に当たってはだいぶ悩みました。周囲が大変な状況にあって、高校進学さえも諦めた友人もいるなかで、家にも家族にも被害がない私が進学してもいいんだろうかと、申し訳ないような気持ちが強くありました。

最終的に進学を決心したのは高校2年生の冬。ただ、どの大学に行くか、何を学ぶかはまったく決まっていませんでした。大学を卒業する4年後に、復興していく故郷に何が必要となっているか見当もつきませんでした。当時は教師か消防士になろうと考えていましたが、人を助けるために何が必要なのかわからないから、いろいろなことを幅広く学べる大学、学部に行きたいと高校の先生に相談したところ、「岩手県立大学の総合政策学部がいいんじゃないか」と勧められました。姉が岩手県立大学の社会福祉学部に通っていたこともあり、話を聞いてみると、先生方の指導も親身だし、学ぶ環境も整っているとのことで、最終的に総合政策学部への進学を決めました。

当時私は、大学は「勉強をするところ」だと思っていました。なので、それまで勉強が得意でなかった私は、大学の授業についていけるかとても不安でした。山のような課題に埋もれ、部屋のなかで苦しんでいる自分を想像しました。

しかし入学してみて、大学は「勉強するところではない」ことに気がつきました。ほかの大学がどうかはわかりませんが、岩手県立大学は、「自分がやりたいことを突き詰める場所」であり、「研究する場所」でした。高校までしてきた勉強は、与えられるものであり、一つの同じ答えに向かっていくもの。大学である研究は、一つの正解に向かって進むのではなく、その答えを自ら見出していくものでした。

私は勉強するのは嫌いだけれど、研究するのは好きなんだなと、大学で初めて気づくことができました。もともと、故郷の復興のために学びたい、力になりたい、困っている人の力になるには何が必要なのかなど、学ぶ目標や目的が明確だったこともよかったのかもしれません。大学で私は、学ぶ楽しさを改めて感じることができました。

故郷を離れたからこそ知れた多角的な視点の大切さ

当時の津波の高さを差し示す菊池さん

1年生の夏休みには、いわて創造教育プログラム（現　地域創造教育プログラム）に参加しました。故郷である釜石コースを選び、釜石市の危機管理課や復興推進課など主に行政の方々からお話を伺いました。

市外からやって来た大学生に向けての話ということで、地域住民にするのとはまた違った視点でのお話が聞けたように思います。当時私は教師か消防士を目指していたので、行政側の視点からのお話がとても興味深かったことを覚えています。ま

た自分自身、地元を少し離れた場所から、一大学生として客観性を持ってお話を聞けたようにも思います。そんな多角的な視点の大切さもまた、大学に入ったことで得られたものでした。

総合政策学部は、1・2年生で幅広い分野を学び、3年生から自分の興味のある分野を専門的に深く学べるカリキュラムとなっています。3年生になり、私は倉原宗孝先生のゼミを選択。倉原先生は、一級建築士の資格を持ちながらまちづくりやコミュニティデザインの分野まで幅広い研究をなさっている先生です。倉原先生からは、全く関係がないように見える分野も実はつながっていることや、触れたことのない学問に接することの大切さや楽しさを教えていただきました。また、ないものはつくればいいという発想の持ち主で、「先行研究がないなら最初に調べた人になればいい」と話されていたことも思い出深いです。

先生といろいろと話すうちに自分のやりたかったことに改めて気づくことができ、さらに的確なアドバイスによって、「学び方」や「調べ方」がわかるようになっていきました。それにつれて、研究や学問の面白さを実感するようにもなっていきました。

卒業論文では、私の地元でもある橋野鉄鉱山が世界遺産に認定されたことに対する住民意識の変化を研究。地域の一員であると同時に、学生という第三者的な立場の今だからこそ聞ける声もあるのではないかと思い、この研究に取り組みました。

現在の仕事にも生きている大学4年間での学び

大学卒業後は故郷に戻り、「株式会社かまいしDMC」に入社。2019年3月に開館した「うのすまい・トモス」内にある「いのちをつなぐ未来館」に勤務し、ガイド兼語り部として、来館する皆さんに震災当時の様子や津波のメカニズムを説明する業務を担当しています。新型コロナウイルスが流行してからは、オンラインでガイドを行うこともあります。

大学での4年間で多くのことを学びましたが、振り返ってみて、今もとても役立っているなと感じるのは、1年生の最初に受けた「基礎教養入門」（現「基礎教養入門Ⅰ」）です。メールの打ち方やお礼状の書き方、報告書の書き方など、社会のマナーやルールを学ぶ授業が大学に入ってすぐにありました。もちろん学生にも役立つものですし、その後の4年間で実際に活用しながら実践できたことで、就職活動の際にも役立ちましたし、社会に出た今もとても助けられています。

またその後の「学の世界入門」（現「基礎教養入門Ⅱ」）も印象深いです。自分の興味のあるニュースを持ち寄りディスカッションする授業だったのですが、それまでディスカッションなんてしたことがなくて。どちらの意見が勝つか負けるか、みたいなものだと思っていたくらいですが、全く違って、ディスカッションとはよりよいものをつくり上げていくための一つの過程であることをその授業で知ることができました。

大学での4年間は、授業でも学生生活でも研究でも、人と関わることがとても多かったように思います。一人の人間として真摯に接し、対話するなかで出てきた言葉を聞き逃さず拾い上げ、その言葉に意味を与える―。今の仕事は、住民の方々の本当の気持ちを聞き取ったり汲み取ったりしなければいけない場面も多いです。たくさんの意見を聞き、それをすり合わせていく必要もあります。大学で過ごした4年間で得た経験や知識、技術が、今の仕事に結びついていると感じることがたびたびあります。

自分に今できることに精一杯向き合いたい

実際に社会に出て働いているうちに、もっと学びたい、もっと知りたいと思うことができ、ときどき何らかの形で研究に戻りたいと思うこともあります。けれど、同じ地域で共に暮らしているからこそ話してもらえることもありますし、何かあったときにすぐに手を差し伸べられることもあります。地元の方と信頼関係を築きながら、地域の一員として故郷の皆さんと過ごし、復興の一助になれたらいいなと思っています。

大学は私にとって、わからないことは人に聞いていいんだ、思った通りに調べていいんだ、調べ方は何通りあってもいいんだ、結果が出なければそれでもいいんだ…そんなことを学べた場所でした。倉原先生はじめ先生方には、研究の仕方の根底の部分を教えていただきました。「一人ですべてを終わらせようとしなくていい」。これはいい方法だった、これはあまりよくない方法だったと、それぞれに発見した人がたくさんいてこその今。そういう時間軸の中に自分がいることを知ることができました。

震災当時通っていた釜石東中学校の跡地を指差す

私は高校生の頃から震災の語り部の活動をしているのですが、以前は、私はこの先一生語り続けていかなければならないという責任感のようなものや、もらった時間内で100％伝えなければいけないというプレッシャーを感じることもありました。しかし大学で学ぶうちに、自分も、これからも続く長い復興の時間軸のなかにあることに気づけました。自分が今していることが、将来誰かの役に立つかも知れない、今自分にできることを精一杯していこうと思えるようになりました。

先生方とは、今でもメールなどでやりとりがあります。2019年に釜石も会場となったラグビーワールドカップの際には、多言語への翻訳について相談にのっていただいたこともあります。

進学すること、故郷を離れることを悩んだ時期もありましたが、地元にずっといては見えなかったもの、わからなかったことが大学で得られたと感じています。大学時代はたった4年間でしたが、これからの長い人生でずっと役に立つ考え方や知識を身につけられたと感じています。

語り継ぐ

震災8年

「釜石の奇跡」で避難 菊池のどかさん

伝承施設の職員に 来月から常駐 きょう一時開館

「経験と向き合い、震災の事実と教訓を誠実に伝えていきたい」と決意する菊池のどかさん＝釜石市鵜住居町

11日に一時オープンするいのちをつなぐ未来館（右）と釜石祈りのパーク（中央）。追悼、教訓発信の場として東日本大震災の記憶をつなぐ＝10日、釜石市鵜住居町（本社小型無人機で撮影）

菊池さんを取り上げた新聞記事（岩手日報2019年3月11日付）